

第一原発敷地に石碑
未曾有の大事故を起こした東京電力福島第一原発の敷地は、かつて太平洋戦争中に特攻隊訓練生を養成した「磐城飛行場」だった。今も原発敷地南側の廃炉作業に伴って設置されたタンク群のエリアに「磐城飛行

戦後80年
ふくしま
第3部 戦争遺構 ②

小型機で特攻隊訓練

「若い兵隊さんが連日、特攻隊の訓練をしていたそうです。大熊町の歴史に詳しい同町小入野の鎌田清衛さん(83)は、原発事故で須賀川市に避難した時、記念碑を写し取った「フロッタージュ」を手に、同原発に近い帰還困難区域の入り口で語り出した。戦時色が色濃くなった1940年、陸軍が磐城飛行場の建設を決めた。住民は転居させられ、周辺の住民も勤労奉仕で駆り出されて手作業で工事が進められた。完成すると、60機ほどの小型の練習機(通称・赤とんぼ)が置かれ、飛行員の訓練が行われた。45年に特攻隊の養成が始まり、短期間の訓練を終えると鹿児島県などの航空基地に配属された。海岸沿いの磐城飛行場は攻撃の標的となり、終戦間際は周辺にも米軍の空襲を受け住民にも死者が出た。米軍機が低空で機銃掃射するのを見て、鎌田さんの顔が見えなくて、母の親族を頼って隣の宮岡町で暮らしていた。磐城飛行



戦後間もない1947年に撮影された旧磐城飛行場を捉えた写真(国土地理院提供)

空襲 低空から機銃掃射



「磐城飛行場跡記念碑」の写しを手にする鎌田さん。遠くに見えるのが磐城飛行場の跡地に立つ福島第一原発。大熊町、須賀川市

場の練習機は終戦前に旧制双葉中を動員して宮岡町・夜の森公園近くに運んで隠したという「竹やぶ」の中に練習機が隠してあるのを見たのを覚えている。戦前から「国策」に翻弄されてきた同町は、原発事故で住民の多くが避難し、原発周辺は帰還困難区域や中間貯蔵施設となった。鎌田さんは古里や歴史が消えてしまふと危機感を募らせ、郷土史の本を出版し、町内の歴史を案内する活動に尽力している。歴史を後世に伝える記念碑だが、皮肉なことに通常立ち入れない場所である。廃炉作業を見届けている。平和への祈りが刻まれた碑文を見つめながら「戦争を知らない世代に歴史を残してくれた先人に感謝する。古里の歴史を次代に引き継ぎたい」と決意を語った。

旧磐城飛行場(大熊町)

磐城飛行場 旧熊町村(現在の大熊町)夫沢の海岸沿いに建設された旧陸軍の飛行場。1940年に建設が始まり、民家11軒が移転し、勤労奉仕などの人力で工事を進め、41年に滑走路などが完成した。42年に陸軍飛行学校磐城分校ができ、45年に磐城飛行場特別攻撃教育隊として独立。終戦間際の8月9、10日に米軍の空襲を受けた。終戦後の跡地は塩田などに利用。62年には東京電力の原発建設候補地となり、後に建設が始まる。88年に「磐城飛行場跡記念碑」が展望台近くに建立された。

▲ 7月28日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

福島市にも模擬爆弾が投下されました。戦争経験者が高齢化する中、積極的に話を聞き、伝えていきたいものです。

